

中山道

なか
せん
どう



むかしは、^{いま}今とは違って ^{ちが}車 ^{くるま}や ^{ひ こう き}飛行機がなく、^{ひと}人 ^{ある}びとは歩いて
^{うま}馬にのったりして ^{とお}遠くへ ^{い どう}移動していました。その ^{い どう}移動の
ため、^{え ど じ だ い}江戸時代に ^{え ど}江戸 (^{げんざい}現在の ^{とうきやうと}東京都) を ^{ちゆうしん}中心とする ^{しゅよう}主要な
^{こうつうもう}交通網として ^{かい どう}5つの ^{ご かい どう}街道 (^{せい び}五街道) が整備されました。そのう
^{ぐ ん ま け ん ない}ち群馬県内を ^{とお}通るのが ^{なか せん どう}中山道です。

かいどう しゅくば せいび みぶん たか ひと ほんじん
街道には宿場が整備され、身分の高い人のために「本陣」
わきほんじん お さんきんこうたい しゅくはく つか
や「脇本陣」が置かれ、参勤交代などの宿泊に使われました。

ほんじん だいみょう みぶん たか ひと と しせつ
▶本陣(大名など身分の高い人が泊まる施設)



わきほんじん ほんじん と ばあい はんどうし はちあ
◀脇本陣(本陣だけでは泊まりきれない場合や、藩士が鉢合

と しせつ
わせになったときに泊まる施設)

しゅくば いっぱん たびびと しゅくはく はた ご や りよかん
宿場には一般の旅人が宿泊する旅籠屋(旅館のようなもの)
あつ かいどう はこ にもつ ちゅうけい
の)も集まり、さらには街道を運ばれる荷物の中継もおこな
にもつ しゅくば つぎ しゅくば
っていました(むかしの荷物は宿場から次の宿場まで、リレ
とど ぐん まけんない なかせんどう
ーのように届けられていました)。群馬県内の中山道には

しんまちしゅく くら が の しゅく たかさきしゅく いたはなしゅく あんなか
新町宿・倉賀野宿・高崎宿・板鼻宿・安中

しゅく まつ い だ しゅく さかもとしゅく しゅくば
宿・松井田宿・坂本宿の7つの宿場があり
ました。





しんまちしゆく じょうやとう 新町宿の常夜灯

なかせんどう え にほんばし
中山道は、江戸の日本橋を

きてん げんざい さいたまけんない
起点として現在の埼玉県内

とお かながわ わた しんまち
を通り、神流川を渡って新町

しゆく はい かながわ わた
宿へ入ります。神流川を渡っ

てすぐのところには常夜灯

た
が建てられていました(※1)。

じょうやとう げんざい がいとう ひとばんじゅうあか
常夜灯とは現在でいう街灯のようなもので、一晩中灯りがつ

いていました。この常夜灯は明治24(1891)年ごろに大八木の

す わ じんじゃさんどう うつ げんざい もと ばし しょ
諏訪神社参道へ移されてしまいましたが、現在では元の場所

ちか ふくげん とうろう た
近くに復元した灯籠が建てられています。

まめちしき

(※1)この常夜灯を建てるにあたっては

はいじん こばやし いっさ もん かね き ふ
俳人・小林一茶も 12文のお金を寄付し
ています。



しんまちしゆく いわはな 新町宿から岩鼻へ

しんまちしゆく め ぬ く い が わ な が
新町宿を抜けるとすぐに温井川が流れていますが、このあ
め い じ しんまちくずいとぼうせきじょ た
たりには明治10(1877)年に新町屑糸紡績所が建てられまし
いと とちゅう で いと
た。ここでは糸をつくる途中で出る糸くずや、くずになった
まゆ つか いと みんかん ばいきゃく
繭を使って糸をつくっていました。のちに民間に売却され、
げんざい か し せいぞう かぶしきがいしゃ
現在はアイスやお菓子を製造する「クラシエフーズ株式会社
しんまちこうじょう し き ち
新町工場」の敷地などとなっています。



ぬ く い が わ わ た なかせんどう ふじおかし ない とお
温井川を渡ると中山道はいったん藤岡市内を通ります。そ
にし すす からすがわ からすがわ や な せ わ た わ た
のまま西へ進むと烏川にあたり、烏川を「柳瀬の渡し」で渡
いわはな や な せ わ た ば げんざい や な せ ば し
ると岩鼻へとつながります。柳瀬の渡し場は現在の柳瀬橋の
すこ かりゅう
少し下流にあったといわれています。

岩鼻から倉賀野宿へ

岩鼻には寛政5(1793)年に、代官所(現在の市役所のようなもの)が置かれ、そこでは税金や治安が管理されていました。

慶応4(1868)年 6 月に岩鼻県が設置されたことにより、その跡地は岩鼻県庁となりました。



岩鼻を過ぎて進むと倉賀野宿に入ります。ここは日光へと続く日光例幣使街道との分かれ道でもあり、常夜灯と道しるべが建てられています。また、烏川左岸の倉賀野には河岸(川船のための港)もあり、ここから船を使って江戸とさまざまな荷物が行き交っていました。

くらがのしゅく たかさきしゅく 倉賀野宿から高崎宿へ



江戸時代、城下の中心であった田町でひらかれた市。たくさんひとでにぎわう様子がよくわかります。

「高崎談圖抄」 正月十月初市(拡大)／高崎市教育委員会所蔵

たかさきしゆく　ひと　く　じょうか　まち　ほんじん
高崎宿は人びとの暮らす城下町でもあったためか、本陣・

わきほんじん　お　たかさき　しなののくに　ながのけん
脇本陣は置かれていませんでした。高崎は信濃国(長野県)へ

い　なかせんどう　えちごのくに　にいがたけん　い　みく　にかいどう　わ　みち
行く中山道と、越後国(新潟県)へ行く三国街道との分かれ道

おお　ひと　ゆ　か　しょうぎょう　さか　とく　たまち
で、多くの人が行き交い、商業も盛んでした。特に田町は「お

え　ど　み　たかさき　たまち　うた
江戸見たけりゃ高崎田町～」と謡われるほどのにぎわいで、

え　ど　ふん　いき
そのにぎやかさは江戸の雰囲気そのものだったそうです。

たかさきじょうか　なかせんどう　もと　げんざい　ひがしいちじょうどお
高崎城下の中山道は、元は現在の東一条通りでしたが、

じょうしゅさ　かい　いえつぐ　じ　だい　いま　とお　うつ　つた
城主酒井家次の時代に今の通りへ移されたと伝わっています。



▲[安中宿入口より倉賀野宿入口迄中山道往還通絵図]文久元(1861)年
(群馬県立図書館デジタルライブラリーより)

高崎宿から豊岡へ

高崎宿の先、烏川には定仮橋と呼ばれる橋がかかっていました。大雨が降るとその橋は流されてしまうことも……。橋が流されると、人びとは渡し船に乗って川を渡りました。



烏川を渡るとそこから豊岡へと出ます。少し進むと信州街道との分かれ道があり、ここには道しるべがありました。道しるべは、どちらの道を行けばいいのか教えてくれる大事な目印です。

草津温泉へ行く人たちは、ここで中山道から右に分かれて、信州街道を進みました。



◀正面 左側面▶

道しるべ
よめるかな？



わ みち ひだり すす なかせんどう い かみとよおか ちゃや
分かれ道を左に進み中山道そのまま行くと上豊岡の茶屋

ほんじん しゅくばくほんじん わきほんじん こと
本陣があります。宿泊ができる本陣や脇本陣とは異なり、

ちゃやほんじん しゅくば しゅくば あいだ くげ ちい たか ひと
茶屋本陣は宿場と宿場の間にあって、公家など地位が高い人

ちゃ の ひる た きゅうけいせんようし せつ たび
がお茶を飲んだりお昼を食べたりする休憩専用施設です。旅

とちゅう つか からだ いや あんぜん やす ばしょ
の途中で疲れた体を癒すだけではなく、安全に休める場所で

かみとよおか ちゃやほんじん げんざい ぐんまけんしていしせき
した。この上豊岡の茶屋本陣は現在、群馬県指定史跡となっ



ていて、だれ
でも見学する
ことができます。

茶屋本陣：飯野家

ちゃやほんじん いいのけ えどじだい つく さかや
茶屋本陣のあった飯野家は、江戸時代は造り酒屋、

こめや いとな だいじぎょうか
米屋などを営む大事業者でした。



か み と よ お か い ち り づ か 上豊岡の一里塚

ちやほんじん す すこ すす いちりづか のこ いちりづか
茶屋本陣を過ぎ少し進むと一里塚が残っています。一里塚

たびびと とお あんぜん もくてきち い かいどうぞ
とは、旅人が遠くまで安全に目的地へ行けるように、街道沿

きより めやす り やく
いに距離の目安として1里(約4キロメートル)ごとにつく



▲昭和40年ごろの一里塚(原田雅純氏撮影、
高崎市立中央図書館 HP 掲載)

めじるし
られた目印のことで

つち き こだか も
す。土や木を小高く盛

つか つく
りあげて塚を作りま

つか うえ
した。塚の上にはエノ

き う
キの木が植えられる

おお
ことが多かったよう
です。

かみとよおかまち ふじづかまち
上豊岡町 と 藤塚町

さかい いちりづか
の境にある一里塚は

けんない のこ ゆいつ
県内に残る唯一の

いちりづか ぐんまけん
一里塚として群馬県

して い し せ き な か せ ん ど う は さ な ん ぼ く
指定史跡となっています。中山道を挟むかたちで南北に2つ
つか み な み が わ つ か う え う
の塚があり、南側の塚の上にはムクノキが植えられています。
き た が わ つ か う え せ ん げ ん じ ん じ ゃ た た か さ き し な い
北側の塚の上には浅間神社が建てられています。高崎市内に
は、このほか、くら が の まち く ぞ う ま ち い ち り づ か
倉賀野町と九蔵町にも一里塚がありましたが、
げ ん ざ い の こ
現在では残っていません。



▲令和8年の一里塚

国道18号線を挟んだ向かい側の塚の上には、浅間神社が建てられている。

いちりづか す すす なかせんどう いたはなしゆく はい
一里塚を過ぎてさらに進むと中山道は板鼻宿へ入ります。

あんなかしゆく まつ いだしゆく とお じょうもう ふだ
さらに安中宿・松井田宿を通り、上毛かるたの“う”の札

う すいとうげ せきしょあと し うすい せきしょ つう か さかもとしゆく
「碓氷峠の関所跡」でも知られる碓氷関所を通過し、坂本宿

へ しんしゅう げんざい ながの けん
を経て信州(現在の長野県)へとつながります。

【9 ページのこたえ】



榛名山
草津温泉

かわなか
かわらゆ温泉
はどのゆ



左中仙道

安中
松井田
横川



『街道の日本史 17』によると、享保元(1716)年に
「中仙道」から「中山道」へ呼称が改められました。

現在の地図上で中山道をみてみよう！

中山道上州七宿めぐり散策図

(令和 7 年 3 月発行版/群馬県 HP より)

<https://www.pref.gunma.jp/page/18421.html>

【参考】

『中山道』群馬県歴史の道調査報告書 Ⅰ

『街道の日本史』 17



なかせんどう
中山道

2026 年 7 月 1 日 初版発行

編集・発行 高崎市立中央図書館
電話 027-322-7919
〒370-0829
群馬県高崎市高松町 5-28
